

青年新書＝12

民謡の旅路

—— 東日本をゆく ——

服部知治 著



日本青年出版社

はつとりともじ
服部知治

1909年（明治42年）、長野県に生まれる。

主 著 『日本の民謡』（1959年刊・三一新書）
『日本民謡論』（1965年刊・新読書社）
『日本民謡』（1970年刊・新日本新書）
『国民経済と食糧自給』（1967年刊・
協同組合経営研究所）『協同組合の思
想』（1967年刊・協同組合図書刊行会）

現 在 日本科学者会議常任幹事

青年新書—12

民謡の旅路 東日本をゆく

1972年6月30日 発行

著 者 服 部 知 治

発 行 日 本 青 年 出 版 社

日 本 青 年 出 版 社

東京都渋谷区代々木5丁目37番15号

振替 東京78932 電 話 (469) 1387

落丁・乱丁はおとりかえいたします（分）0239（製）24005（出）5937



青年新書=12

民謡の旅路

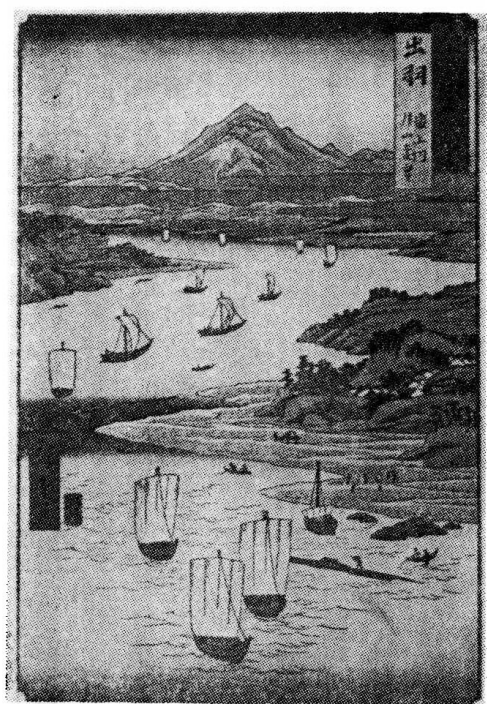
東日本をゆく

服部知治 著

日本青年出版社

東日本をゆく 目次

第一章	日本海と北国と	5
第二章	中央山岳地帯をゆく	51
第三章	東海道の陸と海	79
第四章	関東平野と周辺の山地	105
第五章	南下する寒流	129
第六章	終着駅の北海道へ	161
あとがき		190

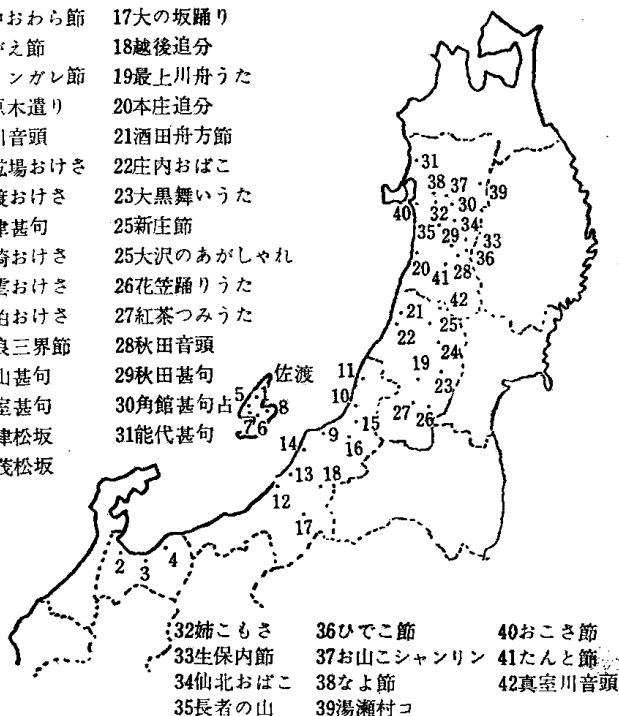


廣重画『六十余州名所図会』のうち
 「出羽 最上川月山遠望」
 「酒田さえぐさげまめでろちゃ」

第一章

日本海と北国と

- | | |
|----------|-------------|
| 1 越中おわら節 | 17 大の坂踊り |
| 2 やがえ節 | 18 越後追分 |
| 3 チョングレ節 | 19 最上川舟うた |
| 4 吉原木遣り | 20 本庄追分 |
| 5 相川音頭 | 21 酒田舟方節 |
| 6 選鉾場おけさ | 22 庄内おぼこ |
| 7 佐渡おけさ | 23 大黒舞いうた |
| 8 両津甚句 | 25 新庄節 |
| 9 柏崎おけさ | 25 大沢のあがしやれ |
| 10 出雲おけさ | 26 花笠踊りうた |
| 11 寺泊おけさ | 27 紅茶つみうた |
| 12 野良三界節 | 28 秋田音頭 |
| 13 米山甚句 | 29 秋田甚句 |
| 14 岩室甚句 | 30 角館甚句占 |
| 15 新津松坂 | 31 能代甚句 |
| 16 加茂松坂 | |



やわらかで情緒豊
かな北国の盆踊り

西国で醸酵した中世の文化
は、陸路を東進するとともに
海路を北進した。

加賀と能登の二国をはさん
で、越前から越中・越後にか
けての越の国は、かつて北陸
道とよばれ、北国といえば、
この地帯をさしている。こん
にちでは、北国の地域ものび
て、出羽から陸奥の津軽地方
までふくまれる。

夏の北陸路は、南面と東面は、とても越えられそうにもない山岳でとざされ、峯みねには雪をいただき、空は青く澄みきっている。アジア大陸の北部からよせてくる北風は、日本海をわたって適度の湿気をおび、ときにはひどい雷雨も降らせるが、夏はひどく解放的である。

能登半島を北にまわれば、海路は富山湾、陸路は富山平野。富山平野にできれば、八尾の美曲『越中おわら節』を聞きのがすことはできない。

越中おわら節

(まえばやし) うたわれよ わしやはやす

(本うた) きたる春風エー 氷がとける (キタサノサーアー ドッコイサノサッサ) うれし
や気ままに オワラ開く梅。

(あとばやし) 三千世界の松の木ア枯れても あんとそわなきや沙婆へでたかいがない
(キタサノサー ドッコイサノサッサ)

ホッとためいき 小粋こわくをながめ

こころも糸かき ないものか。

盆が近うなりや 紺屋へいそぐ

盆のかたびら 白で着しよう。

二百十日に 風さえ吹かにや

早稲の米くて 踊ります。

のびのびしてはいるが、底に北国らしい沈んだ情緒のただよう民謡で、盆踊り曲のなかではもっともすぐれたものである。三味線・胡弓・太鼓のはいる踊りも、曲にあわせて流れるようにすすみ、夜ふけとともに次第に熱気をふくんでくる。

毎年、九月一日から三日間、二百十日の前後を「風の盆」とよんで、八尾町やつおの聞明寺からくりだす、この町あげての盆踊りのうたである。八尾は富山平野が南にはてるところ、大長谷川・野積川・久婦須川が合流して井田川となる合流点にひらけた町である。和紙や漆器の産地でもあり、かつては養蚕もさかんであり、周囲は米産地でもある豊かな町。

高岡には、タタラうたの活気ある『やがえ節』がある。

やがえ節

越中高岡 鋳物の名所 ヤガエフー

火鉢 鍋釜 手取り釜エー。(インヤカサッサイ)

河内丹南^{かわちなんなん} 鋳物のおこり

いまじや高岡 錢屋町。

砂鉄をとかすときのタタラふみの作業うたで、このうたは、夕方からはじまり、翌日の夕方までつづき、その単純な二拍子の労働のなかでうたいだしたものである。

一八一三年(文化二〇)富山平野でおきた百姓一揆のころには、こんなチョンガレ節がうたわれた。

チョンガレ節

やれやれみなさんききねい、これのお国はけっこなお国で、民も楽しみ豊かであつたに、近年めつきりよからぬ奉行が、よくねいつまりを聞きあげ言いあげ、それせえあるのに恒川なんぞが、ひよつく

りつんでてハセを植えたり、開きをするやら、地面をとるやら、なにやらかやらで百姓苦しめ、いよいよつまればむくりをにやして、ヒソヒソ談合とりわけことしは、不作の村むら見立てを願いと、いっかな聞かれず百姓などは、死んでもかまわぬしうちをみたれば、そうはよかれと面あて^{つら}に西町さわがせ若松こわせと、大勢たかつてらんちきさわぎて、頭はられる槍ではつかれる、こりゃまたなんたるうるせえこったにホウ。

富山湾を北にはずれて、もう越後に近い入善町^{にゅうぜん}吉原の海浜には、『吉原木遣り』がうたいつがれている。北前船が西からつたえたものといわれ、西国調の音頭である。これらの曲が、北海道西海岸に渡り名曲『ニシン場音頭』の組み曲をつくりあげた。

佐渡へ佐渡へと草木もなびく

佐渡の文化史には京都の影響が濃厚である。

絶海の孤島ではない。“山椒太夫”の伝説もこれをものがたっている。この伝説でもわかるように、中世には、日本海岸は表日本であり、陸奥や佐渡・越後は、京都からは九州よりも近

かったのである。

その佐渡は、中世には、政治的な敗北者の流刑地であったにもかかわらず、案外、住みよい島であったのではあるまいか。気候もおだやかで、農産物も海産物も豊かであって、京都から流れこんだ文化もよく保存されてきた。戦争がなかったことにもよるだろう。いまでも佐渡は越後や越中にとらない、米産地であり、漁業の島であり、多くの島に共通する貧しさをみせていない。江戸期には金山で知られた。

この豊かな佐渡が島の代表的な民謡は『相川音頭』と『佐渡おけさ』である。

相川音頭は、歌祭文系の音頭であるから、江州音頭や八木節と同系であり、長篇の口説くどきをうたう。踊り手は、江州音頭のように「ヤートコセーノヨイヤナー」と、のびのびとはやさな
いで、「ハイーハイーハイーッ」と、武ばった格調ではやす。このはやしのように、相川音頭
の曲はやや莊重で静肅でさえある。

元禄袖で、編み笠をまえさがりの深目にかぶり、中腰で踊る。中世の風流踊りの美しさをつたえているようである。江戸幕府の金山奉行の面前で踊ったので、「御前踊り」といわれてきたことに、この曲調や踊りの振りをむすびつけ、奉行と直接に顔をあわせることにはばかった遠慮の踊りの振り、という説さえもある。

歌詩、つまり口説の文句も、江州音頭などでは、歌舞伎の演目から取材したものが大部分であるが、相川音頭には琵琶うたのような格式ばった軍談物が多い。それも、徳川將軍にあやかった源平盛衰記式の源氏の大將をうたったものが多い。

相川音頭

〔源平軍談・義経弓流しの一節〕

ドット笑うて立つ浪風の（ハイーハイーハイーッ）荒きおりふし義経公は（ハイーハイーハイーッ）いかがしつらん弓取りおとし（ハイーハイーハイーッ）しかも引潮矢よりもはやく（ハイーハイーハイーッ）

浪にゆられてはるかに遠き（以下はやし略）弓を敵に渡さじものと 駒を浪間にうちいれたまい およぎおよがせ敵船近く……

（以下略）

なかには、平家でも強力無双で知られた悪七兵衛の異名をもつ景清の武勇をうたったものもある。

さても源氏のその勢いは 風にうそぶく猛虎のごとく 雲を望める飛竜にひとし 天魔鬼
神も恐れをなして

あおぎうやまう大將軍は 赤地錦の直垂ひたれをめし さすが美びしくいでたちたまう 藤の
裾濃すこいの御着長おんきせながに

ときの平家の大將軍は 勢ぜいを集めて語りていわく 去年播磨の室山はじめ 備中水島ひよどり鴨越
えの

数度の合戦に味方に利なき これはひとえに源氏の九郎 智謀武略の弓ひきゆえぞ どう
ぞ九郎を討つべき智略

あらまほしやとのたまいければ ときに景清座をすすみいで よしや義経おにがみ鬼神おにがみにても 命
すてなばやすかりなんと

主あるじに最後の暇いとまを告げて 陸おかにあがれば源氏の勢ぜいは あますまじとておめいてかかる 望む
ところと悪七兵衛

太刀をぬきもち秘術をつくし 斬ってかかればたまりもあえず 刃むいたる武士四方へ逃
げる なかにすすみし美尾野谷みおのや四郎

太刀はハッシと打ち折りければ いまはこれまでこはかなわじと 逃ぐる美尾野谷のがし

はやらじ いずくまでもと追いかけたるが

美尾が着せし兜かぶとのしころ しかも二三度手はかけたれど 逃げる勢いとりとめられず さ

れば無念と悪七兵衛

思う敵かたきを逃さじものと 飛んで兜のしころをつかみ 足をふみしめいやと引けば 命かぎ

りと美尾野谷も引く……

(以下略)

さて、民謡の島佐渡の名を高からしめた『佐渡おけさ』を聞こう。相川音頭のうたいだされ
た相川は、「佐渡の金山」の町であり、ここに佐渡おけさのもとうた『選鉱場おけさ』があ
る。曲は佐渡おけさよりも粗野であるが、山菜の味である。

選鉱場おけさ

佐渡の金山 この世の地獄

のぼるはしが 針の山。

朝もはよから かんてらさげて

鉱山通いの ほどのよさ。

『佐渡おけさ』は、『選鉱場おけさ』とはちがい、この島の夏の夜ののどけさに、人間のせつなさをとかしたような曲である。九州のハイヤ節が越後や佐渡にわたったもので、もとは「オケサエー」とはやしたところから、この名がでたといわれるが、「おけさ」の名の由来についてはいまのところ不明である。

佐渡おけさ

ハアー佐渡へー（ハ アリヤサ） 佐渡へと草木もなびくヨ（ハ アリヤアリヤアリヤサ）
佐渡はいよいか 住みよいか。（ハ アリヤアリヤアリヤセ）

波のうえでも ごさるならごんせ

船にゃ艀もある 櫂もある。